

伝道について

牧師 木戸 定

先日、日帰りの手術をしました。自分の名前が呼ばれるのを待っている待合室でのことです。私と同じ手術を受ける人たちがおしゃべりをしていました。

この手術をすれば、あと 10 年ぐらい楽しく生きられるかな。人生、楽しく過ごさなきゃ損だからね。男の楽しみっていうものは飲む、打つ、買うと昔から言われているけれども、そういう楽しみがなくなったら、人生おしまいだね。

そんな本音の話を傍で聞いていた私は、「人生とは・・・」、「生きるとは」、「人生の本当の楽しみとは何か・・・」、そんな話をしようと思いましたが、やめました。聞く耳を持たない人のように思ったからです。そして、後で深く反省しました。

ルカによる福音書 14 章 15 節から 24 節には「大宴会」のたとえが記されています。

食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。そこで、イエスは言われた。「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。すると皆、次々に断った。最初の人、「畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させてください』と言った。ほかの人、『牛を 2 頭ずつ 5 組買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させてください』と言った。また別の人は、『妻を迎えたばかりなので、行くことができません』と言った。僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、僕に言った。『急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』やがて、僕が『御主人様、仰せのとおりにいたしました。まだ席があります』と言うと、主人は言った。『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。言っておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もない。』

神の国で食事をすることができる、その喜びを知らなかったら、たとえ招かれたとしても自分の都合を優先して、断ってしまう、それが私たちのありのままの姿です。どういうところか、よくわからないところへ行くよりも自分自身が楽しいと思うこと、あるいは、しなければならぬことを優先させるものだと思います。

けれども、開教偈（仏教各宗で法要や勤行などの際、読経に入る前に読まれる偈）に、次

のような言葉があります。

無上甚深微妙法

(むーじょうじんじんみみょうのほう)

百千万却難遭遇

(ひゃくせんまんごうなんそうぐう)

我今見聞得受持

(がーこんけんもんとくじゅーじー)

願解如来真實義

(がんげーにょーらいしんじつぎー)

このような意味です。

「あまりにも深く妙なる教えは、無限の時を経てもめぐりあうことは難しい。今、わたくしはお経を見、仏の教えを聞き、拝受することができました。どうか、仏の真実の教えを理解させてください。」

果たして、どれだけの人が、このような気持ちでお経を唱えておられるのか疑問です。

しかし、キリストの福音に出会うということは、それほど有難いことだと、この年になって私はつくづく思うようになりました。類い稀な出会いに恵まれたことに感謝しています。

また、キリストの福音を理解して、自らの人生の糧としていくことも簡単なことではありません。それは、様々な宗派があり、様々な牧師、神父、司祭、そして神学者がキリストの福音について様々な理解を説いていることから分かるのではないかと思います。けれども、確かなことは、私たち一人ひとりに、「無限の時を経てもめぐりあうことは難しい」教えが届けられていることは事実です。もし、宗教離れという現象が起こっているとすれば、キリストの福音に出会った者がそれを伝えることができないでいるからだとして反省しています。おかしい宗教がはびこり、宗教そのものに対する警戒感もあると思いますが、やはり伝道する者の責任もあります。

キリストの福音に限らず、日々訪れる私たちの出会いについて考えてみたいと思います。「ああ、今日は良い人に出会えてよかった」と思うこともあれば、「今日は嫌な人に出会って本当に不愉快だ、嫌な一日だった」と思うこともあります。人間関係がねじれてしまったり、天敵のような人との確執に苦しまなければならぬこともあります。そんな様々な出会いがありますが、考えてみれば、誰とで会おうとも、地球上の何十億といえる人々の中で、今、この人と出会っていること自体奇跡です。ましてや、親子、夫婦、兄弟、仲間として生きていくということはよっぽど縁深い人であると思います。その出会いの背後には神様の深い

摂理が働いていると思わざるを得ません。

私たちは、どうしても自分の損得、善悪、趣向、また価値観で物事を判断してしまいます。この人は嫌い、この人は好き。あるいは、この人は良い人、この人は悪い人というふうに決めつけてしまう傾向にあります。神さまの目から見たらどうであろうか、そういう視点から考えることはありなのではないかと思えます。

誰かとの関係がこじれて、反目しあうことになり、関係を切ってしまうこともあります。けれども、神さまの目から見れば本当は和解しなければならぬ相手なのかも知れません。本音は憎い相手だけれども本心では和解し、互いに心を通わせながら生きてゆきたいと願っている相手なのかも知れません。そして、もし、本音を突き抜けて、本心に気づいて、和解することができれば、どれほどの喜びでしょうか。

宴会に招かれた人たちは、自分の都合は横において招きに応じていたら、言葉で言い表せない喜びをいただくことができたはずです。そのように、自分の本音を横において、本心で生きることができたら、どれほどの喜びをいただくことができるでしょうか。

信仰の視点に立って生きる時、人生にはすべて無駄なものはないことが見えてくるように思います。意味のない出会いや出来事は一つもありません。すべての出会い、出来事の背後に神のみ手が働いています。

昨日のように今日があり、今日のように明日がある、人生何も変わらない。そういうところからは、男の喜びは、飲む、打つ、買うという欲望を満たすだけのことになってしまいます。また野心や、個人の名誉、人々の称賛を求めることから一線を画するのが信仰の道であると思います。何とか、主にある喜びを伝え、永遠の命を受け継ぐものとなっていただきたいと願わずにはおられません。

椎名麟三さんを読む

黒田正純

私の手元に 51 年前の古い写真があつて、宝物のように今も大切にしている。プロテスタント文芸集団「たねの会」例会の時の写真なのだ。写真中央に、椎名麟三さん、高見沢潤子さんの温顔を囲みメンバーが一堂に会した、半世紀前の懐かしい人たちなのだ。その数年前に私もその会に入会したのであった。私は大阪で働いていたが、夜は大阪文学学校に通い、短編の文章など書いていた。合評会があつて、私も深刻な短編らしき作品を書いて、最後に落語の落ちのような書き方をした。私と同年齢の若い女性が、最後まで真剣に読んだのにと明るい声で笑われた思い出がある。学校が終わると玉造駅近くの居酒屋で軽く飲むのが常であった。生野から来ていた在日の在校生の女性が、多くの議論や文学論でも相手を論駁していくスタミナに初めて出会って驚いたものであった。

今年になって無性に椎名麟三さんを読みたくなった。通勤時間を利用して、本をよく読ん

だが、遠藤周作さんなどの本のほか、私の本棚に残らないのだ。テレビドラマでもそうだが、ひとつの消費物のようで、心に残るものが少ないと思うようになってきた。この6年間ほど、英語圏の文学を原書で読むグループに入らせて戴いて辞書を片手に読んできたが、今年になって原点に戻り、椎名さんの作品に集中しますと伝えて退会した。

それからは、古書店を回り、アマゾンなどで椎名さん関係の本を買い、読破していった。私の人生も残り少ないのだ。キリスト者の一人の作家、晩年は病と闘いながら、謙遜でその温顔は、多くの人に温かな勇気を与えてきた椎名さんであったのだ。そして、私が主イエスの復活に救われたように、椎名さんも復活に出会っていた。昭和25年、ドストエフスキーに導かれ、イエス・キリストに自己を賭けて12月に洗礼を受けられた。太宰治の次に自殺するのは、椎名麟三だと噂されたと年譜に書いている頃だ。ところが、洗礼を受けて1年間ほど何も起こらなかった。あるとき、ルカ福音書の復活された主イエスが魚を食べられた個所にきて、必然性の壁がガラガラと崩れるのを経験されて、それまで絶対と考えていたものに一撃を加えられたと伝えている。

61歳で急死された。私の持っている写真の数年後である。若すぎると思った。一作毎にその作品は変化した。まだまだ書くことは増えていく筈だったのだ。晩年の「懲役人の告発」、当時、私は買って読んだ。分からなかった。今、読むと分かってきたのだ。物や金に疎外され始めた時代の流れを見通しされていたのだ。人間の自由と主体性を追求されていたので、経済成長の中、物や金のことばかり語り始める時代に入ると、主役は物になり金になり、人間は自由を失っていく。

寓話的に書くと、現在、若い人も含めて多くの人たちが、スマホに使役されて振り回されているように見える。主役は、スマホという道具、ツールになったかのようである。電車にのると、多くの人達が小さな画面を眺めて一様である。時々、車の運転中に小さな画面を操っている姿を見て、こちらに恐怖が来る。

この9月、私も75歳になり、椎名さんの作品から沢山のエネルギーを戴いている。文中の関西弁のおもしろさ、ちょっと前まで私の身の回りで普通に聞いていたものだ。

椎名さんの作品を通して、椎名さんとの話し合いを類推する楽しみも増えた。

椎名さんの書いた文章、生活の一端を想像するなら、姫路文学館の椎名さんのコーナーを訪れる楽しみもある。

私の老年生活は、少ない年金もあって厳しいものになりそうである。あえて、どん底を生きようと思っている。ニトロをはずせない心臓病を抱えながら、文学を通して、助けてくれと叫んでもいいのだと椎名さんは語っている。重い人生を荷なっている病身の椎名さんの温顔に、私という読者は、深い慰めを与えられるのだ。だから私の厳しい老年も楽しいものにしなければいけないと思っている。

河内・淀川大洪水の救援と奉仕

上田一郎

明治 18 年 7 月一週間以上の大雨が続き、淀川が決壊、大水が地区全域を襲った。

祖父上田貞治郎 26 歳、祖母木下タネは上原方立牧師（熊本バンド同志社出身）ら教友と共に天王寺で二隻の船を雇い、握り飯、水、野菜、衣類、トラクト見舞品を積み、守口稲田方面に激流の中、急行。尾根の上で救いを求める多くの民を助け、励まし、福音を語り、力づけた。

被災地にチフス、結核など、悪病が流行するや宣教医師ティラーと施療院を設け、患者診療と薬を調剤、配布した。

稲田村には牧師館、稲田郵便局長、住吉さん宅があり、祈りと奉仕をつづけた。その働きで、のち稲田教会ができた。

上原方立牧師は、その後、わづか 24 歳チフスで急死、十字架の殉教であった。

(注) 祖父母は信徒伝道者「なにわのしもべさん」であった。私は福音のため、どんなことでもする。(I コリント 9 章 23 節)

編集後記

8 月 5 日から 21 日まで開催されたリオオリンピックで多くの日本選手が活躍し、日本中が熱気に湧きかえりました。どうして、あれだけの活躍ができたのか？一人ひとりの選手が明確な目標をもっていたからだと思います。自分が何を目指しているのか、そのゴールが明確に定まっていると、そこにむけてエネルギーを集中させることができます。使徒言行録 2 章 17 節に「若者は幻を見、老人は夢を見る」とあります。信仰をいただいているからこそ、高齢者になっても悠々自適な老後ではなく、夢を描いて、それに向かって走り続けることができるのでしょう。目的のない人生は刹那的な楽しみに大切な時間を浪費してしまうこととなります。信仰を育み、天に帰るその時まで、命輝かせて生きるものでありたいと願います。